

目を覚ます。

自分を包んでいた毛布を部屋の隅に弾き飛ばすと、汚れた自分の部屋を見渡した。

まるで長い夢を見ていたかのようだ。

手には発砲したときの衝撃がまだジンジンと残っていた。

身体が空っぽになったような喪失感を感じる。私は一人になってしまった。

部屋の隅から不安がこちらを見つめているように感じてしまい、

コートは着替えると外へと駆け出した。

外は既に太陽が沈み切っていたが、街灯が彼女の進む道を照らしている。

無性に怖かった。

私は頼りにしていたフードも、シロも失って、それでも生きていけるのだろうか？

その恐怖から逃れるように無我夢中で走っているさなか、衝撃。

がむしゃらに走っていたコートは、避けきれずに人へとぶつかってしまう。

軽い謝罪を済ませて立ち上がろうとするが、袖をつかまれ、その場に留められた。



アンバー

「待って！コート……？コートじゃない！」



コート

「アンバー！？」

そこにいるのは服も、髪も、ボロボロになったアンバーだった。

彼女は私が本物だと認識すると突然溢れるほどの力でコートを抱きしめた。



アンバー

「よがった！よがった！！！！！」

滝のような涙を流すアンバーにコートは困惑していた。



コート

「なんでアンバーおねえちゃんがこんなに泣くんだよ！」



アンバー

「だって！コートも家から出てこなくなっちゃうから！」



コート

「それは……そう、だけど。」

アンバーおねえちゃんには関係ないだろ！」

突き放そうとするが、アンバーの腕は離れない。

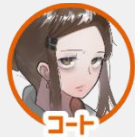




「<sup>かんけい</sup>関係あるっ！！！！」



「だって、あたしは、『おねえちゃん』だから……」



「ど、どういうこと……？」

言葉の真意が掴めずに困惑するコート。

ずびーっ！鼻水の音を最後に、アンバーはようやく泣き止んだ。



「文字通りの意味よ。私はあんたのお姉さんなのよ」



「はあ？」

勿論。そんなはずはない。

姉がいた記憶なんて脳のどこにも収まっていない。

そんな困惑をよそに、アンバーは語りだす。



「あたしのお父さんとお母さんはね  
なんてことない普通の夫婦だったんだ」



「だけど私が中学校を卒業したとき、お父さんが不倫相手と結婚するって離婚をしちゃってさ、  
そこからは意地の張り合いで--、お母さんもすぐに再婚したんだ」



「私は義務養育を終えていたから両親のどちらからも厄介払い、  
ひとりでどこか他の県でも支援に預かろうかと思っていたんだけどさ」



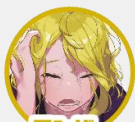
「どっちも同時期に子供を授かったんだ」



「私は両親がどちらも負けず嫌いなことを知っていたから、  
きっと、よくないことになると思ったんだ」



「だから、あんたと……、フードが、中学校を卒業したら、  
2人を家から出してあげようと思って必死に貯金をしていたんだけど……」



「<sup>だま</sup>騙されて、<sup>かね</sup>お金を<sup>も</sup>持ってかれちゃって……」

アンバー

<sup>ふた</sup>再び<sup>な</sup>泣き<sup>だ</sup>出すアンバー。



アンバー

「もうダメかと<sup>なん</sup>ど<sup>おも</sup>も思った」



アンバー

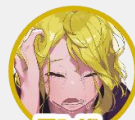
「フードも、コートも、<sup>すく</sup>救えないおねえちゃんでごめんって<sup>なん</sup>ど<sup>あや</sup>ま<sup>ま</sup>謝ったけど」



アンバー

「コートが、コートが<sup>い</sup>生きていてよかった」

コートの<sup>かた</sup>肩はアンバーの<sup>なが</sup>流した<sup>えきたい</sup>液体でびしょびしょになっていたが、  
<sup>いや</sup>嫌な<sup>き</sup>気持ちではなかった。



アンバー

「こんな<sup>や</sup>痩せて……ご<sup>はん</sup>飯<sup>た</sup>食べてるの？」

<sup>ようふく</sup>洋服の上から<sup>うえ</sup>輪郭を<sup>りんかく</sup>確かめるように<sup>たし</sup>撫でたアンバーは、<sup>しんぱい</sup>心配そうに<sup>こえ</sup>声をかける。



コート

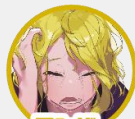
「まあ……<sup>すこ</sup>少しは……」



アンバー

「バカ！ちゃんと<sup>た</sup>食べなさいよお……」

<sup>だつりよく</sup>脱力して<sup>くず</sup>崩れるアンバーをどう<sup>ささ</sup>支えていいかコートは<sup>わ</sup>分からなかった。  
アンバーはそのまま、コートに<sup>せつきょう</sup>説教<sup>つづ</sup>を続ける。



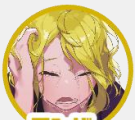
アンバー

「さっきも<sup>とつぜん</sup>突然ぶつかってきてびっくりしたんだから……」



アンバー

「<sup>した</sup>下なんか<sup>む</sup>向いてないで、<sup>まえ</sup>前を<sup>む</sup>向いて<sup>ある</sup>歩きなさいよお……」



アンバー

「<sup>しんごう</sup>信号も<sup>あぶ</sup>危ないから、ちゃんと<sup>みぎ</sup>右も<sup>ひだり</sup>左<sup>み</sup>見て、<sup>あか</sup>赤になってから<sup>わた</sup>渡りなさい……」





「心配ばっかりかけて、本当に、本当に……」



「本当に……生きててよかった……」

アンバーのこえが静かな夜に溶けていく。  
コートは力を入れてアンバーを抱きしめた。

真っ黒な夜空には沢山の星がきらめいていた。  
しかし、今は、その両腕に収まる一つのきらめきを大事にしたかった。

これからのことは私には分からない。  
今からやるべきことや、やらないといけないことが次々と脳裏にあらわれる。

ただ、私は不安でも、怖くても、  
それでも生きていくと決めたんだ。

未来を不必要に恐れて、大切な今を失わないように。  
優しく、可能な限り優しく、アンバーをそっと抱きしめた。

\*\*\*\*

やあ。突然びっくりしたかな？  
キミと二人で過ごせた時間はとても幸せだったよ。

そして――。僕からも言わせてほしい。  
生きることを選んでくれて、ありがとう。

時間はたくさんあったからね。  
キミが、僕が居なくても不安にならないような方法を一人でずっと考えていたんだ。

まあ、たいしたものを用意したワケじゃあないんだけど（笑い声）

少しだけ練習をしたからさ、よければ聞いていってほしいな。

